

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐藤元状

『ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学——イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』

佐藤元状氏の博士論文「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学——イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学」の審査結果について報告する。

本論文が中心的にあつかうのは、現在ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとして総称される、1959年から63年にかけて、リンジー・アンダーソン、カレル・ライス、トニー・リチャードソンによって制作された、労働者階級の若者を主人公にした社会的リアリズム映画、およびこの三人の監督によるその後の作品である。全体は、「フリー・シネマとイギリスのドキュメンタリー運動」、「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとリアリズムの諸問題」、「スウィング・ロンドンの政治学」、「イギリス映画とメタフィクション」の四部から構成され、時系列に沿って、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの運動それ自体の軌跡と、その運動を担ったアンダーソンたちの映画作家としての成長の軌跡の双方を追跡している。

そのような骨太の骨格のなかで佐藤氏は、1930年以降のドキュメンタリー映画からフリー・シネマ（1956-59）をへて、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴにいたるリアリズム映画の歴史を概観し、また、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ時代およびそれ以後のアンダーソン、ライス、リチャードソンの作品を、おもに社会的リアリズムとその美学化としての詩的リアリズムの葛藤という観点から精読することによって、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴをダイナミックな連続性として描こうとしているのである。

第一部「フリー・シネマとイギリスのドキュメンタリー運動」において佐藤氏は、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの前史となるフリー・シネマの運動に注目し、その運動がジョン・グリアソン以来のドキュメンタリー映画とブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの社会的リアリズムを結びつけるものであることを確認している。フリー・シネマ時代のアンダーソンたちは、ドキュメンタリー運動の異端児ハンフリー・ジェニングズをみずからの運動の参照枠としたが、それは、彼らがジェニングズの映画のなかにたんなる「プロパガンダとしてのドキュメンタリー」だけではない、「芸術としてのドキュメンタリー」の可能性を認めたからであった。こうして佐藤氏は、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴのなかに認められる社会的リアリズムと詩的リアリズムの葛藤が、ドキュメンタリー運動に由来するものであることを明らかにしている。

第二部「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとリアリズムの諸問題」を構成する第二章「『土曜の夜と日曜の朝』の複眼的リアリズム」、第三章「『長距離走者の孤独』における風景のリアリズム」、第四章「方法としてのフラッシュバック——『孤独の報酬』における感

情の風景」において佐藤氏は、それぞれの作品のテキストを個別に分析しながら、それら三つの作品を大まかに規定してきた「労働者階級のリアリズム」、「詩的なリアリズム」、「社会的リアリズム」といった名称を批判的に検証し、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴにおけるリアリズムの多様性とそのラディカルな政治性を浮かびあがらせている。

第三部「スウィング・ロンドンの政治学」は、第五章「真面目な事柄についてのコメディ——『モーガン』と表象の政治学」と第六章『if もしも…』における帝国とコラージュの美学——叙事映画と帝国の表象」から構成されている。佐藤氏は、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの社会的リアリズムからの政治的な後退として否定的な評価を与えられてきた、1960年代後半のいわゆる「スウィング・ロンドン」映画としてのこの二作品を、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ以降の最初のブレイクスルーとなった重要な作品として再評価するとともに、その映画がもっているニュー・レフト的な政治的意味の可能性を提起している。

第四部「イギリス映画とメタフィクション」は、第七章「悟りの瞬間——『オー！ ラッキーマン』とメタフィクション」と第八章『フランス軍中尉の女』と時間性のモンタージュ」から構成されている。難解なメタフィクションとして知られる、アンダーソンとライスの中期から後期にかけてのこの二つの映画を、そのメタフィクション性を中心に精緻に分析しながら、佐藤氏は、両作品がアンダーソンやライスがスウィング・ロンドン時代に切り開いた表象の戦略をさらに発展させたものであり、美学としての強度と政治的なメッセージの強度を見事に調和させている作品として高く評価している。

そのうえで佐藤氏が結論として述べていることは、レイモンド・ウィリアムズが主張するように、「リアリズム」が、「方法＝スタイル＝美学としてのリアリズム」と「態度＝批判意識＝政治としてのリアリズム」の双方を意味し、その両者の関係は弁証法的に捉えられなければならないものだとするならば、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとは、まさにウィリアムズ的な弁証法的統合としてのリアリズムにむけての弛まざる運動だった、ということである。

佐藤元状氏の博士論文『ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学——イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』は、とりわけ日本ではあまり研究されていないイギリス映画を正面から扱ったという点でその独自性がまず高く評価された。「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」を担ったリンジー・アンダーソン、カレル・ライス、トニー・リチャードソンを中心に据え、戦前のドキュメンタリー映画、戦後のフリー・シネマとの関係、さらには後の「スウィング・ロンドン」を経て、彼らが独自の実験的美学を開花させるまでの長い年月に及ぶ系譜を、コンパクトでわかりやすい見取り図で提示するのに成功している点もまた本論文の美点と称えられた。論の対象となる具体的な映画作品の分析も丁寧で、関連文献も十分に渉猟していると認められた。

他方、審査員からは、鍵となる「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」という概念が映画史研究で十分市民権を得たものではなく、また該当する作品がイタリアやフランスの「ニ

ュー・ウェイヴ」の概念に必ずしも適合しないという批判、作品の分析でマルクス主義批評家の概念枠組みにとらわれ過ぎた面があるという批判のほか、作品の解釈や専門用語の使用についていくつかの異論や疑問が出された。しかしこれらは、論文の全体としての高い独自性と価値を損なうものではないと認められ、佐藤氏に論文博士（学術）の学位を与えるという結論に満場一致で達した。